伝達場面の構造と「です・ます」の諸機能

○北村　雅則　（愛知県立大），　　加藤 淳（愛知県立大学），石川　美紀子（名古屋大学大学院），
加藤　良徳（日本学術振興会），　　宮地　朝子（名古屋大），　　東　弘子（愛知県立大）
m-kitamura@mvi.biglobe.ne.jp

要旨

「です･ます」は、丁寧語としてだけではなく、場面に応じた様々な感情･態度、特定の役割の演技、わかりやすさなどを示す場合にも使われる。これは「です･ます」が持つ「話手と聞手の距離の表示」という本質と、伝達場面における発話参加者のあり方との関係性によって生じると考えられる。話手と聞手のあり方は「共在－非共在」に分けられ、共在の場合は話手と聞手の間の心的距離があることの表示となり、丁寧さを表す待遇表現になる。一方、非共在の場は、個別･具体的な聞手が存在しない新聞･論文など「非です･ます（だ･である体）」に典型的に表れ、客観的なスタイルとなる。さらに、非共在の場において聞手を必須とする言語表現を共在マーカーとして使用すると、聞手が顕在化し、聞手とあたかも共在しているかのような疑似共在という場がある。書きことばで「です･ます」を使うことでわかりやすいスタイルとなったり、非です･ますスタイルの中に「です･ます」を効果的に使うことで、特別な感情･態度を表示したり、自分とは異なる役割を演出したりする効果も、話手と聞手の関係変化に要因を求めることができる。

１．はじめに

「です･ます」はさまざまな機能を持つ。従来の「です･ます」論は、待遇表現の観点から、また、話しことば･書きことば、文体論といったスタイルの観点からさまざまに説明されてきたが、それぞれが有機的に結びついた統一的な論とはなっていないのが現状である[*1]。「です･ます」の諸機能はどのように説明されうるのか。(1)～(4)を例に考えてみたい。

（1）は、司がクラスメートの女子に対して「非です･ます」を使うのに対し、先生には「です･ます」を使っている。この「です･ます」は待遇表現（丁寧）として機能している[*2]。

（1）[*3]司：「小坂先生に恋人がいることは本当のことだし、みんな、どんな人か興味あるよね」
女子：「あった、すごく興味あった」
（中略）
司：〈石橋先生に対して〉「ね。僕は先生にアドバイスされた通り、みんなの知りたがってることを書いただけです」（**資料1**）

(2)は「だ･である」体で、(3)は「です･ます」体で書かれた社説である。ここでの「です･ます」「非です･ます」の差は、聞手が不特定多数であり待遇とは考えられない。「非です･ます」の（2）に比べ、「です･ます」を用いた（3）は「わかりやすさ」を意図したものであると言える[*4]。

（2）財政再建にあたって国･地方の公務員の総人件費削減は緊急課題だ。高すぎる給料や余剰な定員を大胆に削減する。官僚の抵抗は強まろうが、小泉純一郎首相の言う構造改革の試金石である。
（中日新聞 2005.10.24 社説）

（3）「ポスト郵政」の最大テーマに政府系金融機関の改革が浮上しています。ここは官僚機構のいわば「聖域」です。小泉純一郎首相はどこまで切り込めるでしょうか。
（中日新聞 2005.10.23 社説）

このように「です･ます」「非です･ます」がスタイルとして用いられる場合、従来の研究では、（1）は待遇（敬語論）、（2）（3）は文体論として、別の枠組みで説明されることが多かった。

さらに、「です･ます」の機能には、このような枠組みでは説明しにくいものもある。「非です･ます」スタイルの中にその時だけ独立的に使用されるものである。（4）では「だ･である」体の中に、一文だけ「です･ます」を用いており、こうすることで、「感心」といった感情が表される。

（4）福留が名カメラマンぶりを披露した。（中略）そのうちの1枚がボールがバットに当たる、打つ瞬間を捉（とら）えていた。（中略）いやいや、できる人は何をやらせてもできるということです。（中日スポーツ 2006.2.4）

こういった多岐にわたる「です･ます」の諸機能を統一的に分析するために、本稿は、「です･ます」の本質的機能に着

---

*1　一例として、菊池康人(1996)には次のような記述がある。「「です･ます」は、一連の文章や話し言葉の中では、使うとすれば一貫して使うのが普通で、その意味で文体としての面をもちます。「です･ます」を一貫して使う文体を敬体、一貫して使わない文体を常体と呼びます。（中略）しかし、文体である以前に、「です･ます」はやはりまず敬語です(pp.90-91)」。このように、「です･ます」は文体と敬語の二つの視点から別々に論じられ、統一的に扱われていない。

*2　ここでの「です･ます」、「非です･ます」が使われる場は、鈴木(1997)の「丁寧体世界」･「普通体世界」にそれぞれ相当する。

*3　用例の下線は引用者による。出典が長い場合は、資料出典として最後にまとめて示す。以下の用例も同じである。

*4　東弘子他(2006)、本大会テーマセッション(S1-6)参照。

目する。「です・ます」には、話手と聞手[*5]の間の距離を表示する機能があると考え、その観点から伝達場面の構造をとらえ、それが言語表現とどのように関わるのかを見ていくことにする。

２．伝達場面の構造と表現スタイルの関係性

２．１　話手と聞手のあり方

話手と聞手の関係のあり方として、第一に想定されるのは、個別・具体的な話手と聞手がコミュニケーションを共有するのか、しないのかといった「共在－非共在」の関係[*6]である。

(1)の場合、「です・ます」を使う場合と「非です・ます」を用いる場合の差は、話手と聞手の心的距離の「遠－近」と関係している。つまり、これは、話手と聞手が共在することが事実としてあり、「です・ます」－「非です・ます」という表現形式の選択が、話手と聞手の距離の「遠－近」を反映していると説明できる。

それに対し、(2)(3)ではともに、話手と聞手は共在しておらず、ここでの「です・ます」「非です・ます」の差は、話手と聞手の距離の「遠－近」にあるとは解釈できない。

以上から、「です・ます」の機能は、「共在」「非共在」という伝達場面の違いや、スタイルとして選択されるか、独立的に使われるかといった条件によって、さまざまに分化すると予想できる。

２．２　伝達場面の構造の全体像

話手と聞手の関係という観点から伝達場面の構造をまとめてみる。話手と聞手の関係は、コミュニケーションを共有するか、しないかという「共在－非共在」に典型的に表れ、その場において「です・ます」「非です・ます」がスタイルとして選択されるそのあり方は、以下のように図示できる。

《伝達場面の構造》[*7]

場	心的距離	スタイル
共在	遠 ｜ 近	Aです・ます B非です・ます
非共在	－	C非です・ます

場	心的距離	スタイル
疑似共在	遠 ｜ 近	Dです・ます E非です・ます

みなし

従来、A・Bはいわゆる話しことば、Cは書きことばとされてきた[*8]。しかし、「話す」「書く」という言語伝達の方法の違いだけでは、例えば、手紙に使われる書きことばとしての「です・ます」が待遇表現として機能しているといったことを説明しにくい。よって、枠組みとして、話手と聞手の「共在－非共在」という場に着目するのである。このような視点から見ると、A・Bでは話手と聞手が共在するため、「です・ます」や「終助詞」といった聞手を必須とする表現が用いられ、Cでは非共在であるため、「です・ます」や「終助詞」といった聞手を必須とする表現が用いられないと説明できる。

しかし、スタイルとしてはこれだけではない。書きことばで用いられる「です・ます」や、ブログ・エッセイなどには「非です・ます＋終助詞」のようなものも存在する。不特定多数の聞手に発信されるこのような媒体で、聞手が必須とされる表現が用いられると、不特定多数の聞手が定なる聞手となり、話手と聞手があたかも疑似共在しているかのような場が作り出される。

疑似共在の場が構築されれば、現実としては非共在の場であっても、共在の場へと移行する。しかし、共在と疑似共在の間には、具体的な聞手の存在の有無という差があり、そこに表れる「です・ます」「非です・ます」「終助詞」といった表現形式の機能も変わる。つまり、**①共在の場合は、話手と聞手の心的距離の「遠－近」を表示する機能**を担い、一方、**②疑似共在の場合は、聞手の存在を確定する「共在マーカー」として機能**することになる。

３．伝達場面の構造と「です・ます」の諸機能

３．１　共在(A)－(B)

話手と聞手が共在する場合、(A)「です・ます」は待遇として機能し、話手と聞手の心的距離が「遠」であることを示す。逆に「非です・ます」が用いられれば、話手と聞手の関係は「近」であることを示す[*9]。

(5)〈里見＝助教授、柳原＝医局員、君子＝看護師〉
柳原：財前先生は？
君子：オペに入りましたよー。
柳原：えっ？
君子：今日みたいな大事なオペに遅れるわけないじゃない。
里見：大事なオペってー？
君子：ご存じないんですか？患者，大阪府知事の鶴川

*5　本稿における「話手」と「聞手」は、「話す」という行為の参与者に限定するものではなく、伝達者と解釈者に相当する術語として用いる。例えば、書くメディアにおいては、「書き手」は「話手」に、読者は「聞手」に該当する。

*6　定延(2003)では、Tannen(1980)をもとに「相手と同じコミュニケーションの場に身を置き、その場の中で(時には相手と一緒に)言語表現をおこなうという構図(involvement)」と「解釈者とは切り離された構図(detachment)」を説明している。本稿の「共在」と「非共在」は、この involvement と detachment にそれぞれ対応する。

*7　Aは丁寧体世界、Bは普通体世界(cf.鈴木(1997))、C「非です・ます」は新聞・論文などの客観的スタイル、Dは「わかりやすさ」を意図したスタイル、Eはエッセイ・ブログなどの「主観的・私的なスタイル」である。非共在の「心的距離」は、定なる聞手が存在しないため、話手と聞手の心的距離は判定不能(－)である。

*8　『国文学　解釈と教材の研究』48-12には、話しことばと書きことばが特集されている。

*9　「です・ます→非ですます」と話手と聞手の距離の「遠→近」は連動し、段階的である。

幸三なんです。(資料2)

「〰〰部」と「‐‐‐‐部」の看護師君子の発話から、医局員柳原への心的距離が確定できる。「〰〰部」では「です･ます」を用い、君子は柳原を「遠」に置くが、「‐‐‐‐部」では「非です･ます」を用い「近」にしている。しかし、助教授である里見には、「＝＝部」のように尊敬語や「です･ます」を用い、待遇差を表している。

3．2　非共在(C)

新聞、論文に用いられるスタイルは、不特定多数の聞手に向けられたものであり、聞手の存在は明確ではなく、話手と聞手は非共在である。それだけではなく、受身や主観を廃した表現を使用することによって、話手が表に現れないこともあり、話手と聞手の距離はそもそも生じない。したがって、客観的に事実を伝えるような印象を与える。

(6)「はやぶさ」は小さな金属球を発射させ、舞い上がった岩石の破片を回収するという、いかにも日本的な芸の細かい探査である。わが国独自の技術とアイデアが十分に生かされた。(中日新聞 2005.11.29 社説)

3．3　疑似共在(D)－(E)

話手と聞手が非共在の場合に、「です･ます」や終助詞といった聞手を必須とする共在マーカーを用いると、聞手を顕在化させ、(D)(E)のような疑似共在の場へと変化する。聞手を疑似的に共在させる具体的な聞手へ語りかけるような表現となり、ある種の「わかりやすさ」を表すようになる。

(7)～(9)は、求人誌(資料3)における(D)(E)の例である。求人誌はその性格上、不特定多数の聞手に向けられたものである。ここで、共在マーカーとしての「です･ます」や終助詞が使われると、共在マーカーの不特定多数の中から求人の対象となる人が明確化、顕在化することになる。話手と聞手が共在する(A)－(B)と同じく、疑似共在(D)－(E)も話手と聞手の心的距離「遠－近」を反映している。以下の例では、(7)(8)(9)の順に心的距離が「遠→近」となる。

(7)お客様からなどの電話対応やパソコンでの文書作成などをお願いします。(D)
(8)閉店後のお店の清掃をお願いします。広いお店なのでいい運動になりますよ。
(9)いろんなスポーツ用品やアメカジに囲まれて、楽しくバイトしよう!!(E)

このように、共在マーカーとして用いられる言語表現を見ると、会社が求める人物像が浮かび上がってくる。こうした例は他にも見られる。(10)は新聞の社説、(11)は幼児向け絵本の例である。

(10)と(11)では、異なる共在マーカーを用いている。(10)は新聞の社説であり、読者を節度ある公的な場で疑似共在させ、(11)は親密な私的な場で疑似共在させている。

(10)日本はことしから人口減少時代に入るかもしれません。いまは悲観論ばかりが先行していますが、総選挙では真の豊かさを実感できる社会にする論争を期待します。(中日新聞 2005.8.28 社説)
(11)ここが　どこだか　わかる？
ひまわりが　こんなに　いっぱい　さいて　いて、
まるで　ひまわりの　うみみたいでしょ！(資料4)

4．感情・態度の表示

従来の枠組みでは個別に説明されてきた、感情表示や役割語となる「です･ます」について考察する。これらの場合は、「非です･ます」スタイルにおいて、「です･ます」が独立的に使用される。そこでも、話手と聞手が共在することとなり、その関係のあり方が変化するということによって、感情･態度の表示となると考える。

4．1　(B)にあらわれる「です･ます」

(B)「非です･ます」というスタイルのなかで、独立的に「です･ます」が用いられると、ある種の感情、態度を表せる。

例えば普段(B)のスタイルで会話がなされる親子関係において、子どもが「です･ます」を用いると、「卑屈」といった話手との距離を遠くするような感情を表す[*10]。

(12)〈池田＝父、明日香＝娘〉
池田：だって、おまえ、くじ運悪いからさぁ、ぜーーーったい、変なもの引くぞ！
明日香：ムカつく…信じられないよ。
池田：俺の子だから、間違いない！　俺もそうだからな。いやぁ！楽しみだ。せっかくだから、チョー、ウルトラおもしれぇの引けよ！
明日香：言われなくても、どうせ変なのひきますよーだ！(資料5)

「です･ます」が役割語[*11]を表す場合も、ある種の態度の表示として、感情の表示と連続して捉えることができる。話手が普段とは違うキャラクターに変身し、いつもとは違うスタイルをとって、普段の話手とは違う伝達態度を表示する。(13)は、普段「です･ます」を使わない小学生のび太が思わぬ品物を手に入れて悦に入った場面で「です･ます」を使い、専門家キャラクターとなっている[*12]。

---

*10　https://www.nhk.or.jp/kokugo34/soudan/look.html#01 には、子供が親に謝る際、どのような場合に「です･ます」を使うかについて言及がある。
*11　役割語とは「特定のキャラクターと結びついた、特徴のある言葉づかい」のことを指す。詳細は金水(2003) pp.205 を参照。
*12　定延(2005c) pp.128 参照。

(13)これはたいへんなものですよ。(**資料6**)

ある特定のキャラクターと結びつけられた文末表現「です･ます」を独立的に使うことで、話手と聞手の関係を、「遠」の関係へ変容させている。

4．2　(E)にあらわれる「です･ます」

エッセイやブログなど(E)というスタイルにおいて、「です･ます」が使われる場合も、聞手を疑似共在させることとなり、話手と聞手が共在しなければ表れない「恐縮」や「照れ隠し」といった感情を示す。(14)の「＿＿部」は、「照れ隠し」といった感情を表す。この場合の「です･ます」は共在マーカーとして聞手を顕在化させることとなり、話手と聞手の間に関係が新たに生じさせる。その結果として「親しさ」のような感情の表示となる。

(14)今日は実は結婚記念日。何が食べたいか協議の結果、餃子の王将に決定。でも年取ったせいか(油がきつかったのかな？)夫婦揃ってお腹壊しました。(**資料7**)

4．3　(C)にあらわれる「です･ます」

(C)のスタイルで書かれる論文には、終わりに謝辞が記され、そこで「です･ます」が表れることがある。(C)というスタイルの中で「です･ます」を使うと、「感謝」の意を伝える対象が明確化される。これも、非共在の聞手を擬似的に共在させることにより、生み出される感情といえる。

(15)付記　インフォーマントのお二人、またインフォーマントを紹介してくださった塚田実知代氏にお礼申し上げます。本稿は、国語学会 2000 年度秋季大会で発表した内容を大幅に改訂したものである。発表の際、ご意見･ご教示くださった皆様にお礼申し上げます。(**資料8**)

5．おわりに

以上のように、「です･ます」の諸機能を概観し、その分化が伝達場面の構造と「です･ます」のあらわれ方によることを見てきた。「です･ます」は、丁寧語としてだけではなく、場面に応じた様々な感情･態度、特定の役割の演技、わかりやすさなどを示す場合にも使われる。これは「です･ます」が持つ「話手と聞手の距離の表示」という本質と、伝達場面における発話参加者のあり方(共在－非共在－疑似共在)との関係性によって生じると考えられる。

本稿では、言語形式の個々の用法の記述としてではなく、その用法の様々を、基本機能(「です･ます」の場合「距離」)と、「伝達場面の構造」から説明した。これは、コミュニケーションのあり方の様々を、伝達場面の構造として文法記述に生かす立場であり、その有効性･発展性を主張するものである。

【資料出典】

1.「うちの子にかぎって……」BAN IS FOR BAN 判一彦オフィシャルサイト http://www.plala.or.jp/ban/index.html(2006.2.5 アクセス)
2.「白い巨塔 DVD-BOX 第一部」ポニーキャニオン(2004 年 3 月発売)
3.『タウンワーク名古屋東部･瀬戸周辺版』12/22 号 vol.1・2
4.『よいこのがくしゅう』7月号 第 44 巻第 4 号 学習研究社(2005 年 7 月発行)
5. 運動会の味, 西鉄提供ラジオ番組「土曜ドラマ館」http://www.nnr.co.jp/nnr/inf/drama/ (2006.2.5 アクセス)
6. 藤子･ F ･不二雄『ドラえもん』7巻,小学館,pp.159
7. しろうと女房の厩舎日記 http://blog.livedoor.jp/yukiko_miyamoto1/ (2006.1.30 アクセス)
8. 小西いずみ(2001)「富山県笹川方言における形容動詞述語形式―名詞述語と異なる「～ナ」「～ナカッタ」等を中心に―」『国語学』第 52 巻 3 号 pp.30 ～ pp.44

【参考文献】

東弘子他(2006)「「書くメディア」にあらわれる「です･ます体」のわかりやすさ」言語処理学会第 12 回年次大会テーマセッション

菊池康人(1996)『敬語再入門』丸善ライブラリー

菊池康人(1997)『敬語』講談社学術文庫

金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店

定延利之(2003)「体験と知識―コミュニカティブストラテジー」『国文学 解釈と教材の研究』48-12,學燈社,pp.54-64

定延利之(2005a)『ささやく恋人、りきむレポーター―口の中の文化』岩波書店

定延利之(2005b)「ケース 18　話しことばと書きことば(文字編)」『ケーススタディ　日本語のバラエティ』上野智子･定延利之･佐藤和之･野田春美編,おうふう,pp.108-113

定延利之(2005c)「ケース 21　マンガ･雑誌のことば」『ケーススタディ日本語のバラエティ』上野智子･定延利之･佐藤和之･野田春美編,おうふう,pp.126-133

鈴木睦(1997)「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』田窪行則編,くろしお出版,pp.45-76

日高水穂(2005)「普通体と丁寧体の混在による表現効果」『言語』33-11(創刊 400 号記念特集「日本語総点検」47),明治書院,pp.118-119

森山卓郎(2003)『コミュニケーション力をみがく[日本語表現の戦略]』(ＮＨＫブックス 986)

Tannen, Deborah(1980)"Spoken/Written language and the oral/literate continuum," *Proceedings of the sixth annual meeting of the Berkley Linguistics Society*, University of California, Berkley, pp.207-218

Tannen, Deborah(1982)"The oral/literate continuum in discourse," In Tannen, Deborah(ed.), *Spoken and Written Language: Exploring Orality and Literacy*, Norwood, NJ: ABLEX Publishing Corp., pp.1-16